

## 天文民俗調査報告(2016年)

北尾 浩一\*

### 概要

2009年より天文民俗調査報告を開始してから8年目となった。集落のなかを歩き続けても伝承に出会えない日が多くなってきた。日々の暮らしのなかで形成された星名伝承を伝えている話者に出会うことは、ますます困難になったのである。2016年に実施した調査の主な成果は次の通りである。

- ・島根県隠岐の島町において、タガノバボシを記録することができた。
- ・北海道函館市等において、イカ釣りに関連する星名伝承を記録することができた。
- ・伝統的な伝承が時代とともに変容しながら世代を越えて伝えられている事例「七夕のローソクもらい」を記録することができた。

星名伝承を過去の失われていくものとしてではなく、これからの星と人との多様で豊かなかわりを育むことにつなげるものとして捉えていきたい。

### 1. はじめに

1978年、新潟県佐渡郡相川町姫津(現 佐渡市)より星の伝承の調査をはじめてから39年目になった。調査を実施した地域は、「北海道地方」「中国地方」である。

### 2. 調査の概要

#### 2-1. 調査方法

漁業に従事した経験を持つ高齢者(おおむね昭和15年以前の生年)を中心にインタビュー調査を行なった。最も高齢の伝承者は大正11年生まれ、最も若い伝承者は昭和25年生まれであった。なお、星名とともに年中行事(七夕等)についても調査対象とした。

#### 2-2. 調査地

2016年は、次の10箇所で見学伝承の記録を行なうことができた。

- ・5月…島根県隠岐郡隠岐の島町津戸、那久浜那久、釜屋、蛸木
  - ・7月…北海道函館市浜町、釜谷町、住吉町、北斗市茂辺地、松前郡松前町清部、江良
- また、函館市人見町の七夕のローソクもらいについて、調査を行なった。

### 3. 各地域の星名伝承

2016年に各地域で記録した星名伝承の概要は、次のとおりである。

#### 3-1. 北海道地方

北海道函館市、北斗市、松前郡松前町の調査を実施した。

##### (1) 北海道函館市釜谷町

話者(大正14年生まれ)は、戦争から帰ってきて25歳から漁師を始めた。イカとイワシが主であった。

##### ・オリオン座三つ星

「ミツボシという人もいたし、サンコウという人もいた。昔のイカ釣りの漁師はサンコウ」

##### ・イカ釣りの役星

「サンコウが出てくるとイカが釣れる。サンコウ、等間隔で今も出ている」

「サンコウの出。星が出る時潮の変わり目、イカ釣れる。サンコウ、縦に並んで出る。イカが釣れだしたら、サンコウ出ている。釣れたと思ったら、サンコウ出ている」

##### ・月とサンコウ

「月の出と暮れ(入り)は対象にしたけどね。サンコウは出だけなんだ。月の出、暮れも釣れる」

##### ・七夕のローソクもらい

「『ローソク出せ、出せ、くれないとかっちゃんぞ』と歌いながら、ローソクをもらって歩いた。5人、10人と並んで

\*中之島科学研究所  
kitao@kagaku-shinko.org

歩いた。もらったローソクをつけて、明かりにして歩いた。ローソク以外にお菓子(飴)もくれた。10年くらい前にやらなくなった。子どもも少なくなった」

(2) 北海道函館市住吉町

話者(昭和8年まれ)と、次のように確認しながら記録を行なった。(W:話者、K:北尾)

K「イカがさわぐ(釣れる)のは、月の出も暮れも両方ですか」

W「月の出っていえばやっぱりいいけれど、暮れならうまくないねえ、だめだね」

K「星の出いのはどうですか」

W「星の出いて、やっぱりいいよ」

K「昔の漁師の言葉で」

W「昔の言葉では、ムジラボシとか。ムジラボシ、それからアオボシ、アトボシ。それ出るおりだもんね。いまだったらさ、出ても出なくてもイカがいないからね」

K「アトボシはよく光る星ですか」

W「光るよ」

K「アオボシって」

W「青くね、ぱーと、しらくんだ」

K「しらく？」

W「しらくて光るんだ」

「しらくとは、「光る」という意味である。

K「ひとつの星ですか」

W「ひとつ」

アオボシもアトボシもひとつの星で、アオボシはシリウス、そのあとにのぼるアトボシは明けの明星を意味した。

K「ムジラはどうですか」

W「ムジラボシはね、小さいけどね、3つも4つもかたまっばと出るんだ。こうかたまりなあって鉛の重りみたいにぐーと上がっていくような星でねえか」

ムジラがいちばん最初でムジラの出にイカさわぐ。プレアデス星団を意味する。

W「出るときにとれるんだ」

K「上あがったらだめですか」

W「だめだめ」

星の出にイカが釣れて、星がのぼってしまうと釣れない。星の出と出の間の漁について尋ねると、「やってるけれど、ぱっとしない」という答えが返ってきた。

K「月の出と星の出はどちらがぱっとします？」

W「やっぱり月の出がいちばんとれたからね。月の出いのはいちばんやっぱりとれたものね」

K「月が出て明るくなってしまえば？」

W「あまりぱっとしないけれども」

星名知識の習得方法について確認する。

W「やっぱりおれたち漁師やってたところは、先輩から、あれ何の星だとか、これ何の星だとかって、先輩から習

うんだ」

W「おれたち中学校3年生のとき、もう沖に行っていたからね。そのときから、あれなにぼしだとか、教えるわけさ。おれたちもそれを頭にいれて」

生活に必要な星の知識は、先輩から仕事の現場にて習得したのであった。

(3) 北海道北斗市茂辺地

話者(昭和6年まれ)は、次のようなイカ釣りの役星を伝えていた。

・オリオン座三つ星

「3つに並んでね、ミツボシ。3個に並んであがるんだわ」「星が3つだからミツボシさ」

松前ではサンコウと聞いたという、「ここはミツボシ。やはりその星があがったところにはイカが釣れる。潮が変わるんだべさ」という答えが返ってきた。

・シリウス

アオボシ、ヒカリボシという両方の名前を伝えていた。「朝になると、函館山のところから上がる星。アオボシとかヒカリボシとか、勝手にあだ名つけて」

(4) 北海道松前郡松前町江良

話者(昭和11年まれ)は、次のように、順にのぼってくるムジナ(プレアデス星団)、サンコウ(オリオン座三つ星)、アオボシ(シリウス)を伝えていた。

「昔はね、いまのような機械でなかったもんだからねえ。いまは機械で探すけどね。昔は、とにかく星とかね、なんの星が出るとか、月が出るとか… 星はね、漁師の言葉だからね。だいたい一番最初に出てくるのは6個かたまった星。ムジナとか言ったけどね。6個さ、かたまったような感じ。それからね1、2、3、同じ間隔に縦に3つ並んだ星が出てくるんだ。それがサンコウと言ったね。それからね、次に、夜明け近くになると青く光る星が上がってくるのだよね。アオボシと言ってたね。青く光ったんだねえ。いまでもその星あるけどね。青く光ってた。いまでもそうだよ。秋になると次第に早く上がってきているよね」

「ムジナ、サンコウ、アオボシ… その星はみな同じ間隔で上がってくるんだ。ムジナてね、6個あったですね。いまでもあるけどね。いまの人は誰も星を見ている人いない。ムジナってよく年寄りの人たちが言った。星6つあるからムジナと言ったと思うね。6個あるからムジナと言ったでねえの。たぬきでなくて。6個あるから」

イカ釣りの目標は、昔は星の出であったが、いまは月の出が確実であった。

「月の出、いまでも月の出で釣れますよ。いまは、星はあまり関係ないようだけど。月は確実。月は関係してますよ。昔は、ムジナの出、サンコウの出、アオボシの出が関係した」

「月の出なればイカさわぐ。ついてくる。月の出る何分

か前から。イカがついてきたと思ったら、月が上がってきたとかさ。月の暮れもあるよ。春とれるヤリイカは月の暮れが関係していますよ。潮のかけんでしょね」

また、七夕のローソクもらいについて尋ねると、「私の時代は、そのようなものなかったね。いつからかやるようになったのかね。お菓子とかあげている。私たちの時代はなかったけどね」

昔はなかったが、後に北海道内で普及していくにしたがって、江良地区においても行なうようになったのである。

#### (5) 北海道松前郡松前町江良

話者(昭和12年まれ)は、次のようにサンコウ(オリオン座三つ星)、オオボシ(シリウス)を伝えていた。オオボシは、明けの明星を意味するケースが多いが、この場合はシリウスであった。同じ地域でも話者によって星名が異なるケースもある。話者とは、次のように確認しながら話を進めていった。(W:話者、K:北尾)

W「星の出方でね、何というのかな潮の流れが変わるでしょ。サンコウとかさ、サンコウボシとかさ、アケノミョージューとかってあるでしょ」

K「サンコウボシいのですか」

W「星がこう3つ並んで、サンコウの出とかいってイカが必ず釣れる」

K「サンコウの出になったらイカとれるのですか」

W「とれる。星の出とかさ、月の出とか、月の暮れとか」

K「縦ですか、横ですか」

W「上がってくるのは縦に並んで」

K「大きな星とか」

W「アケノミョージュー」

K「青色の星とかなかったですか」

W「オオボシ。青くきらきら。オオボシ。よく星のことわからねえけど」

K「明けの明星とはちがうのでしょうか」

W「ちがうねえ。アケノミョージューはヨアサ」

#### (6) 北海道函館市人見町

千賀慎一氏、阿部春樹氏の案内で、七夕のローソクもらいの調査を行なった。伝統的な七夕と次の3点が異なっていた。

##### ・歌の一部が歌われなくなっていた点

「竹に短冊、七夕祭り、おーいに祝おう、ローソク1本ちようだいな、けねーばかっちゃくぞ」の「けねーば(くれなければ)かっちゃくぞ(引っ掻くぞ)」が歌われていなかった。「かっちゃく」というのが教育上好ましくないという判断であろうか。

##### ・保護者の同行と終了の時間

幼児から小学1年生くらいまでの子どもには、保護者が付き添っている。また、暗くなる午後8時頃にはほとんど終了となった。校区では学校から午後9時までと

指導されているが、千賀氏によるとぎりぎりまでまわる子どもは見当たらない。

##### ・商業的要素が加わった点

コープさっぽろひとみ店(函館市人見町)にて、配るお菓子の販売コーナーが設けられていた。また、店の前で、子どもたちがローソクもらいの歌を歌うと、お菓子が貰えた。

### 3-2. 中国地方

島根県隠岐の島の調査を実施した。

#### (1) 島根県隠岐郡隠岐の島町津戸

話者(昭和11年まれ)は、プレアデス星団のことをスマルと呼ぶと父から聞いていたが、スマルの出にイカが釣れるという伝承は伝えていなかった。釣れるのは月の出、入りだけであった。

「スマルいうな、スマル。てんてんてんとミツボシみたいな。あれがこう上がってくるとな。だいぶん夜が明けるな」と

「昔は、イカ釣りばかり。スルメイカがね、秋イカと冬イカがとれるけんね。夜通しやるでしょ。いまはイカが釣れんけんね、誰もやらないです。9月、10月頃から秋イカはね、星が出たらイカが釣れるとは言わない。月がね、月入りとか月の出とかいって、イカがとれるいって」

「星は時間を見る。昔は腕時計もないしね、時間帯を見るに、それをつかちよって。スマル、東の空に出てくるけんね。秋イカの頃、それがずーと天井になると夜が明けてくる」

#### (2) 島根県隠岐郡隠岐の島町那久浜那久

『日本星名辞典』に、「浜名久の漁業組合長が、よくシケ前や荒れ前に、南の方にフクク(低く)大きな赤い星が出る。ごく明るいひとつ星。何とか昔云ったようだがと、三人とも思い出せず残念」という記述がある。(野尻 1973) カノープスを意味する可能性があるものの星名は不明であった。

話者(昭和12まれ)は、「いやー昔の、親から聞いたことあったような、忘れたのお。あるような気がするんだよな。そういうようなことは言いよったことは言いよったけどのお。台風の前に、星が輝くとかなんかいうことを言いよったような忘れてしもたわな」と語ったものの星名については記憶をたどることができなかった。

「昔の人は星ばかり見てやりよったがのお。星ばかり見てねえ」

「昔は羅針盤もないのに、ここまで帰ったものだ。竹島から。昼は太陽が東から出て西に沈むだけけんね。夜の方角は星で」

「おやじは、ヨイノミョージュー、ヨナカノミョージューと言っていた。ひとりで海へ行ったのは小学5年のとき。月入りにはイカのとれがよかったがのお。それだけは覚えておる」

その他、スマルという星名を聞いた記憶があるが、イカ釣りと星は関係がなく、月の入りを目標にしていた。

### (3) 島根県隠岐郡隠岐の島町蛸木

話者(昭和5年生まれ)は、オリオン座三つ星の星名タガノバボシを伝えていた。

「漁に出ると出月(でづき)だから、なにの星が出るから… タガノバボシとかいって。地平線から出てくる。3つそろった星。つぎつぎで。東から出てくる」

「一間おきくらいに三つつながっておって、いっしょに出らんけん。距離をある程度二間くらいかな、二間くらい離れて、三つ」

「ここがちょうど肩にかかるところだけん、タガノバボシって、昔は肥やしをいなったり、タガノバボシって水汲みに、ふたつ、右左に、ひとつずつ。中心は人間の肩が。人間の肩」

「ここが中心でな。いなうところ。ここにタガノバって、このくらいのない棒ってあった。ひっかけるものがあった」

「縦に。横には出らんけん。地平線があって、ここにいちばんさきに出てくる。その次にまた出てくる。その次出てくる」

「星の名前は、タガノバボシという名前だね、三つ揃った星をタガノバボシ」

「意味はタガをいなう、いないぼうで。タガノバボシ」

「タガは容器のこと。水汲むタガ。大昔から。こやしを汲む。水を汲むタガ」

タガは桶、バは棒という意味で、εが人間の肩、ζとδが桶である。

プレアデス星団のことは、スマリと言っていたが、タガノバボシとスマリとどちらが先に出るかは昔のことで記憶をたどれなかった。

「スマリとか。それはこまい星がかたまつて、ずっと空のほうに出とるわ」

「どのくらいの時間で出よったか。腕時計もつとらんけん。さきで。このつぎで。どっちかが先に出た。東の空からのお」

また、イカ釣りは、月とともに、タガノバボシを目標にしていた。

「月が入るときに漁があるときもあるし、出月のときに漁があるときもある」

「タガノバボシが出たとき、釣れるときある。必ず釣れるに決まっておらんだけだ。釣れるときも釣れないときもある。出月のほうに漁があるわな」

## 4. 特筆すべき星名伝承

### 4-1. イカ釣りに関係する星名伝承

北海道、東北に広く分布するイカ釣りの役星の伝承

(石橋 1989)が長崎県対馬(北尾 2002)、壱岐(北尾 2011)においても分布することが明かになっており、隠岐の島においても伝えられていると予測していたが、目標にしたのは主に月であり、星は一例のみであった。

### 4-2. 七夕の伝承の変容

2015年5月、東京都三鷹市において、大朝撰子さん(北海道札幌市出身)から聞いた1970年代の江別市のニュータウンの事例では、暗くなつてから提灯のローソクに火をつけて、5、6人くらいで地域の家をまわった。実際に、ローソクをもらい、もらったローソクを提灯に使ったこともあった。

同じく、三鷹市において若島慎兵さん(北海道札幌市出身)から聞いた1990年代の事例では、暗くなつてから歩いたものの提灯ではなく懐中電灯を持って歩き、ローソクではなく、お菓子(包装されたスーパーで売っているようなお菓子)をもらった。しかし、歌の「かっちゃくぞ」という部分も歌われていた。

2016年の事例は、七夕のローソクもらいがさらに次のように変容していた。

・夜間、子どもたちだけでローソクもらいを行なうことから、保護者同行で明るいときのみ行なうという形の変容

・「けねーばかっちゃくぞ」という部分が歌われなくなったという変容

伝承には、時代とともに変容しながら伝えられていく部分と変容しない部分がある。その変容こそ今後の研究課題であり、さらには新たな星と人とのかかわりを育むことに通ずるであろう。

## 5. おわりに

北海道の調査においては、千賀慎一氏と阿部春樹氏のご協力をいただくことができた。また、昨年実施した札幌の七夕のローソクもらいについては、大朝撰子氏、若島慎兵氏のご協力をいただくことができた。紙面を借りてお礼を申し上げます。

### 参考文献

野尻抱影:1973, 日本星名辞典, 東京堂出版

石橋正:1989, 乾杯! 海の男たち, 成山堂書店

北尾浩一:2002, 星の語り部, ウインかもがわ

北尾浩一:2011, 大阪市立科学館研究報告第21号, 天文民俗調査報告(2010年), 大阪市立科学館, 45-50